

ソ連解体以後、自由市場経済と民主主義がおろ歌され、資本主義批判理論としてのマルクスの思想は終わったとされる。柄谷行人法政大学教授はここに、戦前の思考と同じ構造が反復しているという。

「十五年戦争が始まったころ、やはりマルクス主義は終わったといわれ、『近代の起死』論ができた。だが、資本主義が変わっていない以上、その批判であるマルクスの思想はいまこそ重要なのです。現実批判が可能で理念が消えることは、ニヒリズムや、ベルグソンの非合理な生の哲学、さらにロマン主義の復活に連なっている」

土地・人間に生じる矛盾

柄谷は一九七〇年代の初め、新左翼運動が崩壊して「マルクスはためだ」といわれた時期に、『マルクスその可能性の中心』を書いた。何が終焉(しゅうえん)しよう、資本主義は終焉を先送りするシステムであり、終わりをかかえる思想を裏切る。資本主義は主義でも、経済的な下部構造でもなく、それは幻想の体系である。

戦中・戦後のマルクス経済学者宇野弘蔵の理論を引き継ぎ、いまや「宇野・柄谷派」といわれ、三十代の研究者に読み継がれる。いま、新たなマルクス論に取り組んでいる柄谷は語る。

「資本が作れない『外部』が二つある。労働力としての人間と、環境・資源などを含めた土地だ。いまここに資本化の矛盾が生じている。労働力には外国人を安く雇っているし、土地にしても森林が乱伐されるなど地球環境は利潤のために奪われている。マルクスのいう共産主義は、全世界の資本主義化という、全人類がつながった『人類社会』の成立の中でできる。労働力も土地も

「人類社会」の成立で新しい可能性

からたに・こうじん 一九四二年兵庫県生まれ。法政大学教授。文芸評論、現代思想、著書に『日本近代文学の起源』など。



柄谷 行人氏

いまむら・ひとし 一九四三年岐阜県生まれ。東京経済大学経済学部教授。社会思想史。著書に『現代思想の基礎理論』など。



今村 仁司氏

わした・こやた 一九四一年北海道生まれ。札幌大学経済学部教授。哲学。著書に『昭和思想全史』など。



鷲田 小彌太氏

「人類化」しつつあるいま、マルクスの言う可能性ができていくのではないか

一方、今村仁司東京経済大学教授も、ソ連の解体により、やっとなマルクスの思想の可能性が読み直される時がきたとかがえている。マルクス主義はロシア革命以後、「政治の下女」になりながら、体制弁護論として機能してきたからだ。

今村が大学院生だった六〇年代前半は、主体性、疎外論の時代だった。それはルカチチ、サルトルと、長い思想の歴史をもっていた。

「人間一人一人は本来、自由な活動主体なのに、資本主義社会のなかでは物のように対象化され、疎外されている。だから、その疎外から個人を回復して自立させようという思想でした。これはデカルト以来の主体性哲学と同じで、封建制から近代個人へという近代化論にすぎず、マルクスの思想とはどこか違ふと当時

は思っていた」

今村は、日本の主流だったマルクス主義の疎外論的主体論と経済決定論に疑いをもっていたとき、フランス構造主義の思想家アルチュセールの思想に出会い、目覚めたという。人間はもはや社会関係や構造の制作者でなく、反対にそれらの産物であり、その産物が意識をもつ「主体」になったという見方への転換だった。

資本主義分析の正しさ

アルチュセールは、初期マルクスの疎外論から断絶し、後期の『資本論』を構造主義的に読み直した。

「その読み方は、わたしにとって革命的だった」と今村は語る。

日本でも七〇年代以降になると、疎外論にかわって故・廣松渉大教授の「物象化論」が出てくる。廣松は、「社会関係の総体」という視点でマルクス思想をとらえ直し、資本主義社会では、「人と人の関係」が「物と物との関係」となっていく過程を分析した。これは今村の立場にかなり近い。

マルクスの『資本論』を構造主義の先駆としてとらえるのが、冷戦後の新思想かもしれない。

鷲田小彌太札幌大学教授も、マルクスの資本主義分析の正しさを指摘

する。「資本主義とは、自分の本性にもとづいて、諸個人、諸企業の欲望の無制限の発動を許すことで、無限の拡大と発展を目指すシステムであり、計画性も合理性もない。それが資本主義の無意識だと指摘した分析は見事だった」

格差拡大たただす指針に

資本主義が自分の呼び出した欲望をコントロールできないことを発見したマルクスを、鷲田は評価する。また、社会主義は、資本主義にとって代わる社会システムでなく、社会福祉のような資本主義の補助システムにすぎないともいう。

「世界はいまポスター化し、あらゆる分野で格差が拡大している。マルクス主義が、現実の運動として生きていけるとしたら、貧しい人・地域と豊かな人・地域との格差の拡大を是正する運動と結びつく場面に於いてではないか」

(編集委員・西島 建男)



マルクスの読み直し

朝日新聞 97(H9). 8. 5